

## 特色ある学校

# デザイン力を育てる 一人を大切にすることづくり教育

## 1. はじめに

本校は、95年の歴史と伝統を誇る美術とデザインの専門高校である。5つのデザイン系学科（工業科）と美術科が設置されており、場所は、日本一の超高層ビル「あべのハルカス」を見上げる大阪市阿倍野区文の里（文の里の地名は、付近に学校が多くあることから名づけられた）にある。

大正12（1923）年に工芸図案科、金属工芸科、木材工芸科の3科でスタートした大阪市立工芸学校は、後に建築科と美術科が設置され、昭和23（1948）年に大阪市立工芸高等学校となった。昭和32（1957）年には写真工芸科が設置されて6科体制が整った。平成5（1993）年に美術科以外の5つのデザイン系学科をビジュアルデザイン科、プロダクトデザイン科、インテリアデザイン科、建築デザイン科、映像デザイン科に改編し、現在に至っている。入学定員は各科1クラス40名、1学年240名となっており、約76%が女子生徒である。

また、同敷地には昭和16（1941）年に工芸学校第二本科が分離独立した「大阪市立第二工芸高等学校（夜間定時制課程単独校）」があり、校舎を共用している。さらに、昭和63（1988）年には「大阪市立デザイン教育研究所（二年制

大阪市立工芸高等学校 インテリアデザイン科  
教諭 六村 浩士

の専門学校)」が開校し、多くの生徒・学生が昼夜この地で芸術・造形について学んでいる。

## 2. 歴史と伝統の中で学ぶ

デザイン系の各学科では「デザイン史」を開講しているが、本校で採用している「デザイン史」の教科書には大正13（1924）年当時の工芸学校校舎と昭和5（1930）年当時の金属工芸科の実習風景の写真が掲載されている。当時の実習風景は緊張感と堅さを感じさせ、現在の自由な校風とは全く違う様相であるが、校舎の写真を見ると、周りの町並みは変わってもその姿が現在と何一つ変わらないことに驚かされる。



腰折れ屋根（マンサード風の屋根）やイギリス式積み赤レンガ壁、屋根の上にそびえたつ時計台は今でも本校のシンボルである。この校舎は、ドイツのワイマール工芸学校として建築

され、後にデザイン教育の聖地バウハウスの校舎となった建物をモデルに、当時の大阪市営繕課が総力をあげて設計し、大正13（1924）年10月に竣工。平成12（2000）年には「大阪市指定有形文化財」に指定され、平成20（2008）年に経済産業省の「近代化産業遺産」の認定を受けた貴重な文化財建築物である。

校舎だけでなく教育面でも、開校当時世界の最先端の造形教育であったバウハウスの教育理論を取り入れた工芸学校は、我が国でバウハウスの教育理論をいち早く実践していた数少ない学校の一つであり、現在の工芸高校の教育と校舎にその精神が引き継がれている。

未来の芸術家やデザイナーを夢見て入学した生徒たちは、この歴史ある校舎で学び、時には校舎をモチーフにしてスケッチし、また、本館校舎に囲まれた中庭でランチを楽しみ語り合い、休憩時間や放課後の時間を過している。



生徒たちは、教科書から得る知識だけではなく、日頃の学校生活で本物のデザインと建築物の歴史に囲まれ、しぜんと世界のデザインの潮流や歴史を意識し感じとり自らの作品作りに活かしている。工芸高校自体が生きた教材であり、将来への自信の拠り所となっている。また、校内のところどころに卒業生らから寄贈された美術作品があり、これらは芸術やデザインを学ぶうえではとても恵まれた環境といえる。そして教職員もまた過去から引き継いだ教育信条「真実一路 良知を以て己を磨き 敬愛を以て人に

接し 熱意を以て事に当たる」を通して生徒たちが「人を大切にするものづくり」を享受できるよう取り組んでいる。

### 3. 芸術・美術系大学との連携授業

このようにデザイン・造形教育を中心としている本校は、進路についても他の工業系高校とは違った特徴がある。ほとんどの生徒が進学を希望し、中でも四年制大学への進学が多く、その約80%はデザイン、美術系の学科、専攻へ進学している。専門学校への進学もほとんどがデザイン等のクリエイター養成の学校となっている。

近畿圏は芸術・美術系大学の多い地域である。本校の生徒の多くはこれら近畿圏の大学へ進学するが、近年は、各大学とも入試制度が多様化し、6月にはAO入試のエントリーが始まり、夏休みが終わる頃には、多くの3年生が大学受験を終えているという現状になってしまっている。そのため、生徒たちは、早い時期に志望校を決定する必要に迫られる。その上、大学間で類似した学科や専攻があり、大学案内等の資料やweb上の情報だけでは教育内容をつかみにくい。また、デザイン、美術、建築、メディア等のクリエイター養成コースをもつ専門学校は大阪だけで何十校と存在する。生徒たちが志望校を絞り込むことを難しくしている。

このような状況の中、進学先とのミスマッチを防ぎ、早くから志望校選択の行動に移せるように、また、生徒たちの進学への意識を向上させ大学等への理解を深められるよう、本校では大学との連携による特別授業や大学等での体験実習などに積極的に取り組んでいる。

進路指導部では、昨年度10月と3月に高大連携ワークショップを実施し、1・2年生から参加生徒を募り、大学での実習授業を体験させた。その際、大学側には、「本校生徒の専門技術・知識レベルに合った内容」、「高校の施設・設備

ではできない内容」,「高校で使用しない素材を取り入れた内容」,「ユニークな発想,表現,体験ができる内容」を織り込んだ講座をリクエストし,生徒は内容の異なる3~6講座のうちから希望した実習を体験した。

開講された講座は次のようなものであった。

- ・フィギュアの原型制作体験
- ・360度VR映像制作体験
- ・3Dプリンタによる人物のミニチュア制作
- ・絵画レクチャーとミニアチュール制作
- ・ガラスによるタンブラーと平皿制作
- ・MESHを利用したラビットプロトタイピング講座



この他にも学科ごとに高大連携に取り組み,中には年間を通じて通常授業内で大学と連携した授業を展開しているものもある。

高校は,大学とは違い安全性や費用の面から施設・設備や扱える素材に限界がある。また,通常の授業では専門技術・知識の基礎・基本を中心に学ぶので,アイデアや表現に制約が伴い自由な表現に乏しくなる。しかし,大学等での実習体験や連携授業を通して新しい技術や素材に触れ,ユニークな発想法や自由な雰囲気から大学の魅力を感じ取り,進学への期待と希望を抱く生徒も多い。これらの取組は進学意識の向上だけでなく造形技術の深化に役立つ成果を上げていると考えている。

#### 4. 大阪市立デザイン教育研究所との連携

先に述べたように,本校には同じ敷地内に「大

阪市立デザイン教育研究所」(所長は工芸高等学校長と兼任)がある。

大阪市立デザイン教育研究所(以下デ研)は,その名称からイメージし難いが,大阪市が運営する二年制の専修学校(専門課程デザイン科)である。工芸高校との継続的専門教育を目的として設立された。

1学年45名のうち多くは本校からの進学であるが,全国の高校のデザイン系学科の卒業生も在籍している。卒業後の進路は,就職希望者の9割がデザイナーとして,視覚・空間・環境・物のデザインの仕事についている。

デ研の教育目標は,シンボルマークにあるate(アート・テクノロジー・エンジニアリングの頭文字)の融合であり,工業製品やそれに類する“モノ”や“コト”の制作目的にかなう



様々な能力を備えたデザイナーの育成を継続的専門教育のポリシーとして掲げている。

工芸高校各科の特色を引き継ぎながらリーダーシップ力を持ち,システム思考・デザイン思考で問題解決する人材育成を目指しており,学生は高校時代の学科の特徴であるアートとエンジニアリングを本人の専門とし,デ研でテクノロジーを加えて研究と学習を進めることになる。

また,近年は「UXデザイン」「インタラクティブデザイン」などをデ研での最先端で最大難度の研究・学習項目と位置付け,「UXデザイン」はチームで行うプロジェクト学習(企業や地域と連携した課題解決プログラム:年間で50程度を実施)で実践的に学んでいる。

デ研では,学生と工芸高校生と第二工芸高校生の合同プロジェクトのほか,入学希望のデザイン系の高校生を対象としたプログラムも実施している。また,市立の学校であることから,

多くの公的機関等のデザイン制作にも携わっており、現在も、来春開校予定の学校のCIデザインに、学生と工芸高校生の合同プロジェクトが展開中である。

## 5. キャリア教育への取組

本校では、大学などの進学先との連携授業だけではなく、キャリア教育の一環として外部の教育関係機関や民間企業等、そしてデザイナーとして活躍している卒業生らの協力による特別授業を行っている。専門科それぞれが外部の機関と連携した独自の取組を行っていることが特色といえる。

一例をあげると、インテリアデザイン科と大阪の支援学校との取組は、本校との間で30年以上続いてきたものである。内容は、交流授業と支援学校で使用する「教具」の制作である。「教具」とは学習効果を向上させるため児童・生徒個々の実態にみあった自立支援のための教材で、支援学校から依頼をうけた教具のデザインと制作を本校生徒が複数のグループで行い、それらは実際に支援学校で使用されている。

授業は、年間を通して、次の手順で実施し、教具には約半年の制作期間をかけている。

- ① 本校生徒たちが支援学校を訪問し交流授業、障がいのある子どもたちの行動や感覚の理解、過去に制作された教具から制作する上で注意するポイントを確認。
- ② 支援学校から依頼された教具の確認と制作工程の計画と試作。
- ③ 支援学校の教員が来校。試作のプレゼンテーションと改善点の検討。
- ④ 知育玩具を学ぶための講義を受講、教具制作。
- ⑤ 支援学校の教員が来校。制作した教具のプレゼンテーション。
- ⑥ 支援学校の生徒に向けた教具の使用法紹介ビデオの制作。

- ⑦ 支援学校を訪問。交流授業と作品の贈呈式。



これらの一連の制作過程はデザイナーの実質的なデザインワークに近く、授業の行程をクライアントからの要望、マーケティングによる調査、プレゼンテーション、デザインによる問題解決と置き換えて考えることができる。また、教具を「作る」だけではなく交流授業を行うことで「使い手」のことをより意識した作品作りをすることができる。障がい者のためのデザインを考え、実際に使用できる作品を作り出すことは高校生にとっては難しい課題であったと思うが、障がい者への理解とモノづくりへの責任を体験し、次世代のノーマライゼーションを担う人材育成へと繋がる取組である。

## 6. おわりに

デザイナーには、人々の暮らしのなかに存在する問題点を新たな形態や視覚情報を提供することで解決する役割がある。独りよがりを作るだけではデザインの意味をなさない。そのことを実感し理解するには、机上の作業や校内だけの行動では難しい。生徒たちが社会との接点を多くもち、いろいろな人との関わりから社会について考え社会性を身につけていくことが「人を大切に作るものづくり」のできるデザイナーの育成へと繋がっていくと考える。今後もデザインの育成へと繋がっていくと考える。今後もデザイン、ものづくりによる実践的なキャリア教育の取組を継続、発展させていきたい。